

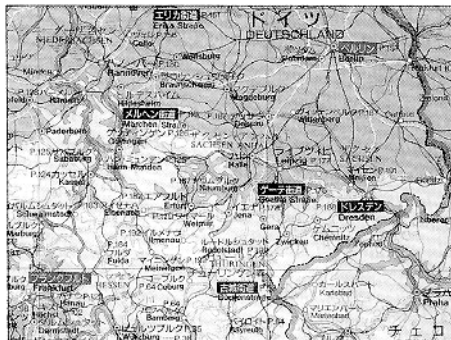
人名索引

- 【あ】 雨宮貞幹：5、荒木（大阪控訴院長荒木博臣の子・農林学校予科卒業生）：28・29・32、アセツソル（林務官補）：29
- 【い】 池田清：5、池田正介（陸軍少佐）：5・19・24、石田：28、出口伯母：24、岩佐：52、岩崎（通信省）：5・7・9、岩谷孫造：46、イマイステル（教授）：24・35・47・49
- 【う】 内海五郎：5、ウエベル（ミュンヘン大学教授）：51・52
- 【お】 大久保学而：22、大高佐市（香港・日本ホテル）：9、大迫尚道（留学生）：23・24、小野田安太郎：5、折原（河原井）：5・25・47
- 【か】 影山：52、勝島仙之助（農林学校教授・ベルリンに留学）：5・16・19・22・23・39・43・47、金子茂樹：5、ガエイル（前ミュンヘン大学総長）：51、カール（林務官補）：32
- 【く】 栗野慎一郎（外信局長）：5、草刈義三郎（高田商会・商業学校卒業生）：5・7・16・19・25・29、クラスマンの父（ミュンヘン）：47、グラスマン（ミュンヘン）：28・28、クルーゲ（宿の主人）：36・41
- 【け】 ケルトネル（林務官補）：34・44
- 【こ】 興然僧：12、小西成章：5・26・27
- 【さ】 西園寺（ドイツ国・日本公使）：21、斎藤幹（香港・日本領事代理）：9、澤野格太郎（中国・留学生）：9、ザクセン皇帝：23・24・25
- 【し】 塩田武八郎：5、志賀（泰山）：22・25、白石の兄：5、釈迦然（目白新長谷寺の僧侶）：15、島村：24・47、シミット（ドクトル助教・隣室者）：22・24・25・26・27・29・30・31・32・33・35・36・37・39・41・42・43・44・45・47・48
- 【す】 スマンガラ僧正：15、ステットネル（本屋）：24・26・30・31・33・36・39・42
- 【せ】 セットウイツ（オーストリア伯爵・学生）：45
- 【そ】 草加長二郎：43、祖根（富田商会）：21・22
- 【た】 高橋建造：21、多賀要造：5、竹澤（正金銀行リオン出張所）：5・7
- 【つ】 坪野平太郎（通信省参事官・パリ留学生）：5・29・31、ツベ（教授・ザクセン国枢密顧問官）：34
- 【な】 中村弥六：52、奈良原繁：21、奈良原竹熊：21・22
- 【に】 西村新七：5、ニッチセ（プロの写真家）：29・47、ニッチセー（ニッチェ・動物学教授）：40・41・43
- 【ね】 根岸千仞：5
- 【は】 ハイブリッヒ・コッタ（林学者）：24、ハーテル：47、ハルチヒ（元老）：52
- 【ひ】 ヒルトネル（植物学・ドクトル）：29・30・31・33・34・35・36・37・39・41・42・44・45・46・47、ビットネル（植物園管理長）：33
- 【ふ】 福富幸臨（米留留学生）：20、藤本大尉：52、プレンタ（プレンタノ・財政学教授）：51
- 【ほ】 細井均：5、ホイエル：31、ホルヘルト（大林区長・山林局長）：48・49、ホッタ（ドクトル）：25・29・34・36・45、本多銚子（妻）：5・25・26・32・43・44・46・47
- 【ま】 前田校長：26、前田先生（目黒）：26、松野教授（東京山林学校初代校長）：5・25・49、松岡氏伴：5、的場：23・28
- 【む】 向井（海軍省・フライベルグ住留学生）：23・27・28・29・31・32・37・39・42・43・45
- 【や】 安田庄之助：5、安仲田岩：5、山崎：5、山田文太郎：23・28
- 【ゆ】 湯目：46、ユーダイヒ（森林学者ターラント山林学校長）：22・23・25・47・49

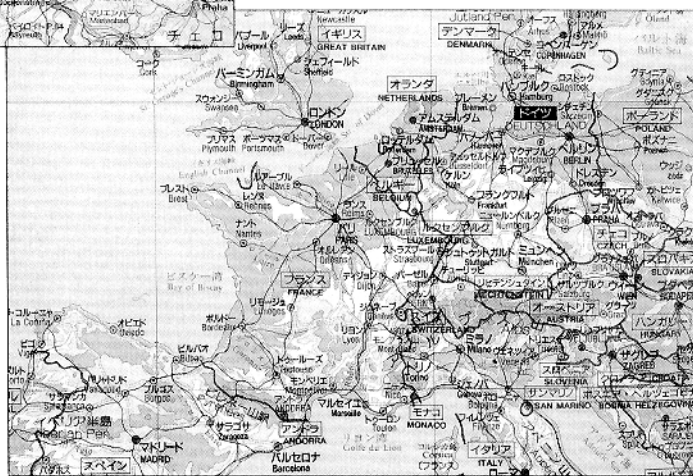
地名索引

- 【あ】アイヒワルド(独) : 48、アデン(イエメン) : 16、アレキサン
 ドリア : 18、アンデンブルグ(独) : 47、48、【い】伊豆・天城山 : 5、29
 38、【う】ウイルムスドルフ(独) : 42、【え】エデルクローネ(エノデハ
 クロネ・イーデルクローネ・独) : 29、35、42、46、エルナウン(独) : 41、
 【お】オガシ(独) : 50
- 【か】【き】キプスドル(独) : 47、【く】クルメンフルース(独) : 44、
 【こ】紅海 : 17、神戸 : 5、コスマレスドルフ(コスマンドルフ・独) : 39、
 41、42、46、ゴルトネース(独) : 42、コロンボ(セイロン) : 14
- 【さ】サイゴン(越) : 12、ザクセン王国 : 22、29、33、37、42、48、
 50、【し】芝新堀町 : 5、新橋駅 : 5、上海(中) : 7、8、シネーヘルグ
 (独) : 50、シンガポール : 12、【す】スエズ : 17、18、スチルペー(独)
 : 47、スマトラ : 14、【そ】ゾンスドルフ(独) : 34、39、46
- 【た】ターラント(独) : 22、23、24、25、26、28、37、38、40、41、
 43、44、48、49、51、タールミユラ(独) : 46、【ち】チツベルワルトス
 トルフ(独) : 43、【て】テーフリッツ(奥) : 49、テーツヘン(テッヘ
 ン・独) : 50、【と】ドイベン(トイベン・ドクヘン・独) : 28、37、トウ
 ペンベルグ(奥) : 49、ドレスデン(独) : 22、29、30、32、34、38、39、
 40、41、42、43、45、46、47
- 【な】
- 【は】ハインスベルグ(独) : 37、47、パリ(仏) : 20、27、ハルタ
 (独) : 24、25、【ひ】ビクトリアパーク(香港) : 10、ヒンテルダルフ村
 (独) : 44、【ふ】フェルスドルフ(独) : 50、フリードリヒ(独) : 21、
 フライベルク(独) : 23、27、32、39、43、44、プ라우イン(独) : 38、
 プリンケナウ(独) : 50、【へ】ベルリン(独) : 21、27、40
- 【ほ】ポイゼハワルト(独) : 42、ホースブリック(独) : 43、ポーデンパ
 ッハ(独) : 50、ポートサイド(エジプト) : 18、香港 : 9
- 【ま】マイセン(独) : 36、マルセイユ(仏) : 19、モルデル(独) :

- 【や】【よ】横浜 : 5
- 【ら】ライプツヒー(独) : 22、ラベナウ(ラベナウグルント・独)
 : 33、42、ランドベルリケ(ランドベルグ・独) : 43、44、【れ】レーヘル
 ト(独) : 48、【ろ】ロンドン(英) : 28



▼ヨーロッパ広域地図



本多静六博士の業績

■経歴

慶応二（一八六六）年七月二日、武蔵国埼玉郡河原井村（現埼玉県菫蒲町大字河原井）の折原家の第六子として生まれる。明治十七（一八八四）年東京山林学校に入学。明治二十二（一八八九）年、本多家の婿養子となり、本多姓となる。明治二十三（一八九〇）年東京農林学校（駒場農学校と東京山林学校が合併して東京農林学校となる。現東京大学農学部的前身）を卒業と同時にドイツ留学。経済学のドクトルを取得した後、明治二十五（一八九二）年に帰国、東京農科大学の助教となる。

明治三十二（一八九九）年、「森林植物帯論」により日本で最初の「林学博士」の学位を取得する。明治三十三（一九〇〇）年教授に昇任。昭和二（一九二七）年に東京帝国大学を定年退職するまで、林学の教育研究にあたった。昭和二十七（一九五二）年一月二十九日、静岡県伊東市において逝去、享年八十五歳。

■業績

博士の業績は、林学、造園学等の専門分野にとどまらず、新聞・ラジオ等での人生相談にわたるまで広範囲に及ぶため、これらを網羅することは至難である。このため、ここでは便宜上五つの分野にわけて主な業績を記すことにした。

(1) 大学教授としての業績

● 造林学、林政学をはじめ林学分野の専門書を著述し、日本林学の基礎固めと発展に貢献。また造園の分野においても日本で初めて正式な「造園学」の講義を開講した。

● 大学演習林の設置に尽力し、演習林の収益を大学経営に反映させた。

● 大隈重信の依頼を受け、早稲田専門学校（早稲田大学の前身）の嘱託教授として林学経済学、農政経済学を講義。

(2) 関係機関等における業績

鉅毒調査委員会（明治三十五年）、東京市水源経営調査委員会顧問（明

治四十二年）、明治神宮造営局参与（大正四年）、大日本山林会理事（大正四年）、帝都振興院参与（大正十二年）、都市美協会副会頭（大正十五年）、帝國森林会会長（大正十五年）、日本庭園学会会長（昭和三年）、埼玉県人会副会長（昭和六年）、日本庭園学会会長（昭和八年）、日本造園学会会長（昭和八年）、日本風景協会副会長（昭和九年）、等々

(3) 公園の分野における業績

● 国立公園の創設に尽力（昭和四年国立公園協会副会長、昭和六年国立公園委員会委員）

● 東京日比谷公園の設計（明治三十四年）を第一号に、以降全国各地の都市公園から森林公園にいたる主要な公園の新設・改良の設計に携わる。公園の普及を図るとともに、設計の手法を確立した。

● 公園設計の手法を基に各地の観光地・温泉地の風景利用・改良発展策を提言した。

(4) 講演・著述活動における業績

二十六歳の時から一日一頁の文章執筆を始める。特に東京大学定年退職後は、全国各地において講演活動を展開、その内容の多くが著書（一般教養書）として残されている。

博士が著した著書は、一説に三七六冊。内訳は一般教養書五十三冊、造林学書三十冊、一般林学書二十八冊、公庭園関係書二二六冊、全集・百科事典等の分担分三十五冊、旅行記その他一〇四冊等。このうち一般教養書に属する「成功への秘訣」が、「自分を生かす人生」と改題され現在でも出版されている（三笠書房・東大名誉教授竹内均特別解説）。

(5) 蓄財家・慈善家としての業績

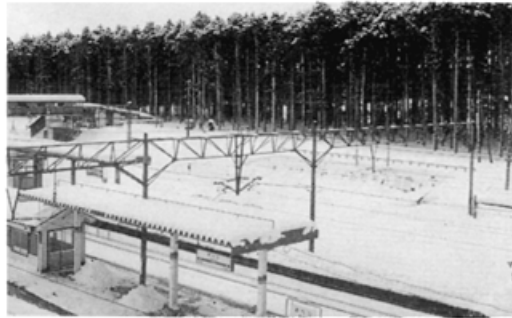
● 独自の四分の一天引き貯金（月給その他臨時収入の四分の一を貯金するもの）を実践。蓄えたお金を土地・山林・株等に積極的に投資し、巨万の富を築く。

● 蓄えた多額の財産を公共のために寄附。故郷、埼玉県へは大滝村の山林を寄附し、これから得られる収入が現在奨学資金となっている。埼玉学生誘掖会会頭にも就任（大正十年）。

本多静六博士設計による全国各地の代表的な公園



▲大沼国定公園（北海道七飯町） 北海道函館支庁より公園設計を委嘱された博士は、大正3年(1913)に改良計画を作成。翌年からこの計画を基に改良工事が進んだ。



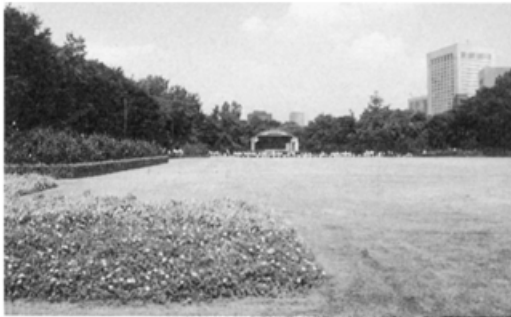
▲鉄道防雪原林（青森県野辺地町） 降雪による列車の運行停止を防ぐために博士が提言したもの。野辺地防雪林は、明治26(1893)にできた日本最古の防雪原林。



▲鶴ヶ城公園（福島県津若松市） 大正6年(1917)設計により現在の公園の基礎ができた。同公園の桜の植樹は博士の提言によるもの。



▲備後園（茨城県水戸市） 日本三名園中、最も優れた公園と絶賛した本多博士。大正9年(1920)に当時常磐公園と呼ばれた同公園の改良案を提言した。



▲日比谷公園（東京都千代田区） 博士の公園設計第1号となった日比谷公園(1901)。この実績がきっかけとなり、全国各地の公園設計に携わるようになった。



▲懐古園（長野県小諸市） 大正15年(1926)に設計。園内には博士の提言を基にした県下で最古の動物園、遊園地がある。桜の名所としても有名。



▲卯辰山公園（石川県金沢市） 同市の公園台帳にも「大正12年(1923)12月、日本庭園協会の本多静六博士の設計改良案により公園を改修する」と記されている。



▲大濠公園（福岡県福岡市） 改良ではなく新設という点では日比谷公園と同じ。大正13年(1924)に設計。池の中に浮かぶ「菖蒲島・松島・柳島」は博士の命名。

公園設計の特色

渋谷 克美

■ 「道楽」!?で全国数百の公園設計に携わる

本多静六博士は、専門の森林美学を応用し、明治後期から、大正、昭和初期にかけて全国各地の公園等の設計を手掛けました。

明治以降、生活の近代化、都市化により、国内における「公園」の認識は徐々に高まり、国を挙げて各地の景勝地や都市に隣接した遊休地を公園にしようとする動きが盛んになってきました。

しかしその当時、日本人で近代的な公園の設計を引き受ける者は殆どいませんでした。というのも、日本の公園のイメージは、庭師の手による庭園的なものが主であったためです。そして、その数少ない日本人の公園設計者の中に本多博士がいました。

博士が設計や改造に携わった公園の数は、全国に数百あると自ら話していますが、このことについて博士は、「私は、私の本務である造林学研究の余暇、ほんの少し森林美学の応用として各地公園の設計を引き受けている。その数は大小数十にも達しているが、これはいわゆる道楽でやっているものである」（大正三年・北海道「大沼公園改良案」より）と述べています。

ここで博士がいう「道楽」とは、博士の著書『わが処世の秘訣』の中で述べている「職業の道楽化」という意味です。つまり、博士は、

「私の体験によれば、人生の最大幸福は職業の道楽化にある。富も名誉も美衣美食も、職業道楽の愉快さには遠く及ばない。職業の道楽化とは、学者のいわゆる職業の芸術化、趣味化、遊戯化、スポーツ化もしくは享楽化であって、私はこれを手取り早く道楽化と称する」としています。

したがって、ここでいう道楽は本務に匹敵するか、それ以上の楽しみとして行っているといえます。ここに博士が設計・改造に携わった代表的な

公園を北から幾つかあげると次のようになります。

春採公園（北海道釧路市）、大沼公園（北海道七飯町）、鶴ヶ城公園（福島県会津若松市）、敷島公園（群馬県前橋市）、借楽園（茨城県水戸市）、日比谷公園（東京都千代田区）、明治神宮（東京都渋谷区）、懐古園（長野県小諸市）、卯辰山公園（石川県金沢市）、中村公園（愛知県名古屋市中区）、大濠公園・東公園・西公園（福岡県福岡市）等々。

これらの公園は、現在でも各地域を代表する名勝地・観光地として有名なのですが、その設計には共通した思想、手法が用いられていました。

■ 「独立自強」の時代こそ健康第一に

博士は全国各地を駆け巡りながら、公園の必要性が必ずしも認識されていなかった当時であって、大規模な公園の整備を訴えました。その三段論法的な持論は次のようなものでした。

- ① 都市では自動車等の交通機関や産業が発達し、人々の生活は人工的・機械的となり、塵埃と喧騒により不健康の状態に陥っている。
- ② また、情報や物資の国際化は今や無視できるものではなく、積極的に世界文化の大勢に通じる必要性が出てきた。
- ③ 戦争により多くの貴重な人材を失ったため、今後は「独立自強」の心構えが必要となる。そのためには何よりも健康が第一である。
- ④ 健康を維持するには、「新鮮な空気」「十分な日光」「新鮮な食事」の三つが必要であるが、特に都市に住む人は、これらが十分に得られないため不健康になりがちである。
- ⑤ そのために公園が必要なのであるが、小さな公園では意味がなく、森林公園や天然公園のような大きな公園が必要である。
- ⑥ 一方、都市に大きな公園を造ることは莫大な費用が掛かる。反面、都市近郊の山村には天然の風景に恵まれた公園に適したところが多い。
- ⑦ そこで都市ではなく、山村などの地方に施設の整った大公園を造れば、都市としての発達を促すばかりでなく、地方文化の普及・発展につながるのである。

というのが、本多博士が公園の必要性を説いた論拠ですが、特に⑦の考
え方は、今日でいう「まちおこし」にもつながる発想ではないでしょうか。
■ **公園設計の具体的な手法**

公園設計の専門家として各地に招かれた博士は、まず初めにその地域の
実状に詳しい者に案内してもらい、おおむね一週間、現地調査をすること
から始めました。

博士は公園の設計にあたっては、「その天然の地勢、地形、気候・風土
はもちろん、付近の史跡、名勝、天然記念物、歴史・伝説、及び地方民の
要求、人情、風俗、習慣、経済の状況等に関する該博な知識」が必要であ
るとし、さらに既存の施設を最大限活用し、「最小の経費で最大の効果を
収める」ようにしなければなりません。（大正十五年・長野県
「須坂町公園設計案」より）

博士はこうした考え方をもとに、おおむね次の手順で公園の設計にあた
りました。

- ① 公園となる区域（地域）が有する、他には見られない特徴、主にその長
所と短所を見出し、人と物の流れを考える。
- ② 人の流れとしての公園への交通手段を考える。多くは自動車 交通に
対応したアクセス道路の整備、乗り合いバス等の導入を提言。
- ③ 公園内の大・中・小の回遊道路、散策路等の園路を設計。
- ④ 植栽計画。桜山、紅葉谷などというように特色と変化を持たせた 植
栽を設計。この場合、元々自然にある植生を改造するという発想ではなく、
最低限の人の手を加え、風景美を助長するものとし、あたかも元あった自
然のように見せるのがポイントとしている。
- ⑤ 展望台、東屋、茶店、運動場、自然動物公園・植物園、トイレ、ベン
チ、屑籠、案内板等、今日公園に必要とされている各種施設をどこのどの
場所に、どのように整備するかを具体的に提言。
- ⑥ 地場産業発展のための名物・土産品の開発を促すと共に、観光PRの
具体的な手法について提言。
- ⑦ 公園の美化、維持・保存を長く図るための保勝会を設立することを提

言。
以上が博士が実践した、公園設計の手法とも言えるもので、この手法を
確立したことに大きな意義があるといえます。

■ **公園の設計を通じて地域の発展、観光振興にも貢献**

博士は明治三十四（一九〇二）年の日比谷公園の設計を皮切りに、明治・
大正・昭和と約三十五年間にわたって各地の公園設計に携わりましたが、
その業績として称えられるものを整理すると次のようになります。

- ① 公園の必要性が一般庶民の間に認識されていなかった明治・大正期に、
その重要性を説き、普及に尽力したこと。
- ② 今日のが国における公園設計の技術・手法の基礎を確立したこと。
- ③ 公園の整備を通じ、地域の発展や観光振興に大きく貢献したこと。
- ④ 荒廃しつつあった史跡や名勝地を公園として整備することにより、今
日の観光拠点に発展させたこと。
- ⑤ 植栽計画を中心とした公園設計が、今日の環境保全に大きく役立って
いること。

後年、博士は公園設計のポリシーを「独立自強」と「健康第一主義」の
二つの言葉に代表するようになりました。

「独立自強」とは「親譲りの財産などを当てにせず、人の世話にもなら
ず、各々が自分で働いて生きていくこと」であり、そのためには身体が丈
夫でなければならぬから、「健康第一主義」になるのだというものです。
さらに、豊かな自然環境の中に、施設の整った公園を整備すれば、人々の
健康が保たれるだけでなく、山村地域の道路や施設の整備も進み、自ずと
地方の文化や生活水準も高まるというのが博士の持論です。

こうすることによって、国民一人ひとりが等しく豊かな文化に接するこ
とができるようになる、というのが本多博士の公園設計の目的でもあり、
願いでもありました。

本多静六博士の手がけた全国の公園等一覧

菫蒲町では、本町出身の日本最初の林学博士・名誉町民本多静六（1866～1952）の顕彰事業を行っています。博士は近代日本の林学、造林学の基礎を築くと共に、全国各地の公園の設計や地域振興にも携わりました。

ここに掲げた公園等の一覧は、博士が設計、改造、提言等にかかわった全国各地の公園等のうち所在が判明しているものを記したものです。

企画制作／菫蒲町 本多静六博士を記念する会（機関誌「本多静六通信」）

協力／東京大学農学部林学科森林風致計画研究室 埼玉県東京事務所 菫蒲ライオンズクラブ

参考資料／『本多静六伝（武田正三著）』『本多静六先生論説及び公園設計集』『本多静六先生公園設計集』『本多静六先生論説集』『本多静六先生公園設計案Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

平成9年2月現在

- 山形県 温海町 温海温泉改良私見
- 新潟県 笹神村 村杉温泉風景利用策
- 石川県 金沢市 卯辰山公園
- 岐阜県 岐阜市 岐阜公園（金華山公園）
- 養老町 養老公園
- 福井県 武生市 芦山公園（蘆山公園）
- 滋賀県 大津市 （大津森林公園）
- 兵庫県 神戸市 有馬温泉風景利用策
- 城崎町 城崎温泉改良策
- 島根県 松江市 城山公園
- 広島県 広島市 広島市の風景利用
- 廿日市市 桂公園
- 宮島町 宮島公園（厳島公園）
- 尾道市 千光寺公園（尾道公園）
- 東城町 帝釈峡風景利用策
- 山口県 岩国市 岩国風景利用策
- 下関市 日和山公園
- 福岡県 北九州市 清滝公園（門司公園）
- 北九州市 帆柱公園（八幡大公園）
- 福岡市 東公園
- 福岡市 西公園
- 福岡市 大濠公園
- 大分県 別府市 （別府森林公園）
- 湯布院町 由布院温泉発展策
- 宮崎県 宮崎市 青島保護利用策
- 鹿児島県 霧島町 霧島屋久国立公園の一部（霧島公園）



*（ ）は設計当時の公園名

- 北海道 七飯町 大沼公園
- 釧路市 春採公園（釧路公園）
- 室蘭市 （室蘭公園）
- 青森県 野辺地町 鉄道防雪林
- 宮城県 松島町 松島公園
- 福島県 会津若松市 鶴ヶ城公園（若松公園）
- 茨城県 水戸市 偕楽園（常磐公園）
- 栃木県 日光市 日光の風景利用策
- 群馬県 伊香保町 伊香保温泉の新経営
- 前橋市 敷島公園
- 埼玉県 飯能市 （飯能遊園地）
- 大宮市 大宮公園（氷川公園）
- 大滝村 森林公園と奥秩父
- 秩父市 羊山公園（秩父公園）
- 東京都 千代田区 日比谷公園
- 渋谷区 明治神宮
- 奥多摩町 奥多摩風景利用策
- 千葉県 君津市 高岩山自然公園（鹿野山公園）
- 天津小湊町 南房総固定公園（清澄山公園）
- 野田市 清水公園
- 神奈川県 大磯町 （大磯公園）
- 箱根町 箱根風景利用策
- 山梨県 甲府市 舞鶴公園（甲府公園）
- 甲府市 遊亀公園
- 長野県 軽井沢町 （軽井沢遊園地）
- 木曾福島市 木曾の風景利用策
- 小諸市 懐古園
- 須坂市 臥竜公園
- 須坂市 （鎌田山公園）
- 飯山市 城山公園
- 山ノ内町 山之内温泉風景利用策
- 飯田市 天竜峡風景利用策
- 駒ヶ根市 中央アルプス自然公園の一部（菅の台遊藝地）
- 静岡県 清水市 三保の松原（千本松原）
- 愛知県 名古屋市 中村公園
- 岡崎市 岡崎公園
- 清洲町 清洲公園
- 犬山市 日本ライン風景利用策
- 瀬戸市 定光寺公園
- 津島市 天王川公園
- 名古屋市 鶴舞公園
- 和歌山県 和歌山市 和歌山公園
- 奈良県 吉野町 吉野熊野国立公園・吉野山（吉野山公園）
- 奈良市 奈良公園
- 大阪府 箕面市 箕面公園
- 堺市 濱寺公園
- 大阪市 住吉公園

明治神宮と本多博士

小山 千秋

明治神宮は、明治天皇と昭憲皇太后を祭るため、大正九年、代々木の地に造営された。武蔵野台地にあり、元大名屋敷で後御料地となったが、天皇は殊にこの地の風光を愛し、皇后のためにお休み所とお庭を造られた。今も旧御苑として残されている。

広大な森は、東京の緑のオアシスとして、老若男女と時代を問わず人の流れの断えることがない。一度訪れると、必ずや再度引きつけられる魅力の森である。

その森とは、原宿駅から南参道大鳥居をくぐれば、シイ、シラカシ、クスノキの覆いかかる広い玉砂利の参道に吸い込まれ、数分歩くと、都会から森へ、更に進んで橋から流れを見れば深山幽谷を思わせ、いつしか森の人になってしまう。正参道から社殿に向かえば、在来の赤松に広葉樹を補植して荘重な神域を演出している。

代々木駅から北参道に下り立てば、大鳥居前にムクの大木と、雌雄のイチョウが昔のまま聳え立ち、対して西側に苑内最大のマキの木が植えられている。

薄暗いシイ、シラカシの林をぬけると、池を通して広大な草原が見えてくる。高台の宝物殿から南面に広がる芝生の中程に流れがあり、柳や数本の松が森を背景にひとときわ風情を醸してゆとりとやすらぎを与えてくれる。正に神宮の大奥といえよう。

小田急参宮橋駅から西参道に入れば、沿道には多彩な木々が混植され、四季折々の彩りで森へ誘う。

一 本多と神宮

大正四年「明治神宮造営局」が組織され、メンバーに、東京帝国大学林学博士川瀬善太郎、同本多静六、造園学ドクトル本郷高德、農学博士原選、同折下吉延、助手として寺崎良策、上原敬二氏ら師弟が参画し、本多が中

心となり遂行された。

二 基本設計（全体構想）

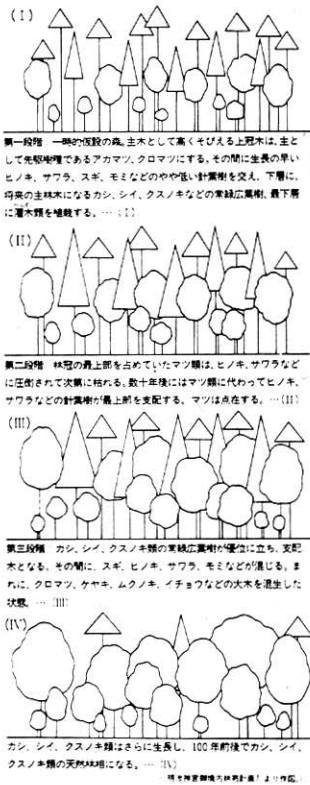
御料地と練兵場の一部七十二ヘクタールを内苑とし、社殿、宝物殿、庭園等の文化施設を設けて、荘厳な森林景観を造る。青山練兵場五十一ヘクタールを外苑とし、運動施設を設置し、内外苑を合わせて我が国最初の都市総合公園としての機能を備え、国民体育大会、オリンピック大会を視野に入れた、国際都市東京の都市計画公園に位置づける。

三 神苑の設計

神宮の特徴は、何といっても森にある。本多にとつて運命を賭けた大事業である。設計の主旨（ねらい）は言うまでもなく幽邃荘厳で悠久の森を造成することである。

度重なる論議は、針葉樹か広葉樹かに終止し、窮極「人工天然更新照葉樹林」の造成と決まった。

直ちに総理大臣大隈重信公から「神苑は杉をもつて荘重森厳な景観とすべし」という達しがあり、本多は代々木の地に杉の不向きな理由を説明した。「林相は二日にして成るものではない。代々木の土と、土の選ぶ木が、長年かけて、自然の営みとして造りあげるものである。それを保護・援助するのが、林学・造園の技術である」として「林相変遷予想図」を五十年、百年、百五十年の三段階に分けて作成し、理論の裏づけとしたが理解されなかった。そこで、「樹幹解析法」（幹の切断面調査）で実証し、納得を得た一幕もあった。



〔大森会に造られた森—明治神宮の森に学ぶ—より〕

次いで全国（台湾・朝鮮・樺太含む）からの献木が決まる。本多は、百年後の都市環境に合う木、東京に移植可能な木八十種類のリストを示して、受入れを諒承した。更に鉄道や船の運賃を半額にすることを認めさせて募集をした。結果的に予定の十万本が集まった。菖蒲町からも、通信三号に既報の通り、南参道の一の鳥居左前のクスノキを河原井の吉野家から、同右前のクスノキを加須市の網野家から、榊を鷺宮町の白石家から献上している。時に本多は、「根を焼いて持つてくるように」と指示したそうである。この手法は今でも移植の秘訣として履行されている。

四 神苑の施工

「大都会に造られた森」(一九九二年・(社)農山漁村文化協会発売)によれば、原宿駅から引込線を入れ、連日搬入される木を、植栽図に従って現場に運ぶ牛馬や人夫、植木職人、指揮する学者や役人が入り乱れて、戦場のようなであった。時には一日数十輦も入荷し、不眠不休で処理することもあり、八十日間に亘る苦闘が続いたと記録されている。

予想される工事の遅延に、全国青年団の奉仕隊を募り、一万数千人の応援を得て森は完成した。正に知恵と力の結集によって造られた森といえよう。

五 神宮の森の意義

日本の都市は緑を切り開いて造る。ヨーロッパでは自然の緑を残して街を広げて行く。日本の都市に緑の少ない理由の中で、神宮の森は、世界に例を見ない都市造林として、貴重な意義を持つている。

人間の植えた木を自然が育て、淘汰して極相²の照葉樹林に更新している。その姿が予想図より早めに進行していることは、いかに先人が勇気を以て自然に従い、忠実に自然を守って来たか、その結果が学術的に、社会的に評価されている。

フランス・ベルサイユ宮殿の森(ボスケ)がこの例に似ている。

*1 シイ、カシのような常緑広葉樹

*2 群落変遷が最終安定した林相



▲ 明治神宮・南参道一の鳥居



▲ 明治神宮・御苑

平成十年五月十五日印刷
平成十年五月二十六日発行
明治二十三年

洋行日誌

編集・発行／
本多静六博士を記念する会
埼玉県南埼玉郡菖蒲町新堀三八
菖蒲町役場企画財務課内
☎二四六―〇一九二
電話 ○四八〇(85)二二一代
印刷／文泉堂
電話 ○四八〇(85)二八九〇